

# 「風説を信じたこと」

漆山 秋雄

全カリの「立教科目」が2005年度の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された。本学全カりに、また一つ大きな実績が加わることになった。近年、全国の大学では自校教育の重要性が認識されている。各大学の、地域における存在の意味と独自性の発見を、その歴史的な発展の検証から行おうとする動きであろう。対して、「立教科目」は自校の歴史の教育ではもちろんない。立教の建学の精神に立脚して、人間としての真実のあり方を見つめつつ、現代的なそれぞれのテーマについて具体的に考えてみようとする科目群であり、大いに期待したい。

遠い昔の個人的な話で恐縮であるが、私が立教大学を志望した理由は、立教の語学教育に関する“風説”にある。私は高校で英語がきわめて不得意であった。これではならじと悶々としていた。そこに、“立教大学では理学部でも講義はすべて英語で行われる”ということ言う人がいたのである。まわりの友人もそれとなく肯定していた。いろいろ考えてみるとどうやら本当のようである。自分を何とかしなかったから、一点突破で、立教で英語の授業を受けるのだと奮い立ったのである。昔の情報対処能力がこの程度であったのは不思議である（私だけであったわけではない。医学部ができるという説で立教に来た人もいたという）。本当に全部が英語の講義であったら大変なことになっただろうが、どうやら助かってしまった。入学して、なーんだと落胆したのかどうかについてはあまり記憶が鮮明でない。それより、英語の授業がすばらしかった。博識な先生に接して、いっぺんに英語大好き学生に早変わりとなった。化学では、ある物質を合成することに成功したとき、それが物質の本来の姿であるということを表すために、英語では物質の方が主語の受動形で書くことを学んだ。これは、実に私が“化学に目覚めた”一瞬であった。

今、大手予備校では、立教は語学教育がちゃんとしているからと受験生に薦めているという。これの方は風説を基にしたものではなくて本当のことだ。「英語の立教」については大いに努力されたと思うし、現在の問題としても議論されることである。「将来の立教の特色ある言語教育プログラム」は、私は、「話題となって注目されなければならないもの」ではないと思う。地味な表現となるのだが、小人数クラスの維持の努力であり、バラエティーの富む科目配置と、そしてなにより丁寧で優しい教育姿勢のことだと思う。これを現在の全カリ言語教育でやっている。

うるしやま あきお（本学理学部教授、言語教育科目担当部長）